Oggi 9月号　平成14年7月27日（土曜日）　P.333

CEOと呼ばれる女性たち
川﨑昌子さん
女性である
こと"を生かして
「衣・食・遊」を発信

Oggi 9月号　平成14年7月27日（土曜日）　P.334

「女性の仕事って、ほとんどが言味期限付きなんです。ある程度の年齢に達すると、現場から退かなければならないのが現実。これでは、女性はロングランのライフプランを立てることなんてできませんよ」

そう熱く語るのは、大阪を拠点に、アパレル業界のみならず、経営界で注目を浴びている株式会社エニーズの代表取締役・川崎昌子さん（40歳）だ。クライアントひとりひとりの専属スタイリストとして、オーダーメイドのビジネススーツや小物をセットで提案するビジネスを成功させた。

女性がもつ細やかさを生かして、クライアントの個性やビジネスの特徴、ライフスタイルに基づいたコーディネートをアドバイスする。川崎さんは、クライアントの個性（キャラクター）を引き出すスタイリストという意味で、この職業に〝キャラリスト〟と名をつけた。

「女性の雇用の場を広げることが、私が会社を立ち上げた理由。特にシングルマザーにチャンスの場をどんどんつくっていきたいんです」

川崎さん自身もシングルマザー。痛みも憤りも、身をもって感じてきたからこそ、今、できることがあるはずだと、彼女は目を輝かせる。

シングルマザーに生きるチャンスの場を！

「離婚するまでは、絵に描いたような、ふつうの女性の幸せなスタイル」を送っていたという川崎さん。大手の建設会社に就職し、数年間OL生活を満喫したあと、結婚退職。1年後には、娘の愛香ちゃんにも恵まれた。だが、ある日、1歳になる娘をあやしながら、家のベランダで洗濯をしているとき、ふと〝私のライフパートナーは、今のままではない〟という直感に襲われる。

「世間が勝手にこうくれるような離婚の理由はないんです。夫や結婚生活に不満があったわけでもありません。でも、もうそれまでと同じ生活を続けることはできませんでした。これまでにも何回か、将来の自分の姿や予想めいた直感というのがイメージとして浮かんできたことがあるんです。その直感、はずれたことがありません。実は、19歳のとき、35歳の自分が会社の社長をバリバリやっているのを直感したことがあるんです。でも、当時の私は、ふつうの結婚生活を望んでいたので、その直感を打ち消していたんですね。結局は、離婚して、執着修正をはかり、35歳のときには、直感どおりに社長をやってましたけど（笑）」

再出発のために、会社事務所に勤めたあと、ホームステイで預かっていたオーストラリアの女子学生の従兄弟たちと意気投合し、共同でネイティブスピーカーのいる英会話スクールを開校。これが、あっという間に人気の学校となった。

「カルチャースクールの入っているビルに教室を借りて、生徒募集のチラシを配ったんです。そうしたら、スタート時から60人の生徒が集まって、〝えっ、こんなにうまくいっていいの？〟私って、自営業に向いてたんや、と思いましたね」

その後、ニューヨークのファッションを扱う個人輸入のセレクトショップを4店舗経営するなど、どんどん事業を拡大していった。

ところが、娘が小学校3年生になったとき、学校の懇談会に出かけた川崎さんは、そこで、衝撃的な事実を知る。忙しさに紛れ、娘の学校を訪れるのは、入学式以来だった。

「久しぶりに娘の同級生のお母さんたちと顔を合わせて、いろんな話をしていたら、クラスの半数が母子家庭だということがわかったんです。

〝わっ、みんな、私と同じシングル

CEOをめざす女性たち

会社概要

●株式会社エニーエ
大阪市西区北堀江1-6-2
サンワールドビル5F
電話・06-6537-0400
http://www.anyx.co.jp
設立／2000年2月
資本金／10,500,000円　従業員／20名
業務内容／ビジネスシーンにおけるトータルコーディネートを提案するオーダーメイドファッション事業、店舗の運営・管理・販売代行を中心としたファッション・雑貨のリテールエージェント事業、フード事業、リーシング事業、アウトプレースメント事業

マザーなんや」と、びっくりしました。そして、シングルマザーの置かれている現状を目の当たりにして、ショックを受けました。ほとんどのシングルマザーが、昇りような仕事に就けずに、パートで生計をたてていたんです。中には、昼間はスーパーでパートで働き、夜は水商売で生活を支えているというお母さんもいました。どうなっているんだ日本！と憤りを感じました。シングルマザーと言っただけで、正社員としての就職はアウトですか。職力とは関係なくね。考えてみたら、私もシングルマザーというだけで、不当な扱いをされたことがありました。離婚が決まり、それまで住んでいたマンションを引き払って、新しい住居を探そうとしていたときのことです。不動産屋さんを何軒か回っても、シングルマザーだとわかると、だれも部屋を貸してくれないんです。「夫がいやがる」と。私は小さいながらも会社を経営していて、年収はこれだけありますという証拠を見せてもダメ。ものすごく差別されているなぁと感じました。シングルマザーに対する世間の厳しさ、冷たさ。本当に悔しい思いをしました。今はもう、シングルマザーはマイノリティではないんですよ。女性が社会でもある年齢は、どこどこみんなでいっています。それなのに、社会に受け皿がない。子供を預ける、育てていかなければいけない。今、お金と仕事ところがいちばん必要なのは、シングルマザーなのに。それからですね、そんな女性たちにチャンスの場をつくってあげられる会社をつくらないだろうか、彼女たちが、安心して女性力を発揮できる土台はないだろうか、と真剣に考え始めたのは」

個人事業主として会社経営をしてきた山崎さんが、独自で事業を興したのは、株式会社エニーエを起こしたのは、そんな思いからだった。

異業種間のある仕事を複数同じまるノウハウとは

「服飾、キャリリストという職業はアパレル業界向けにつくったのですが、けっこうこれがハードルの高い職業だったんですね。クライアントには、社会的に地位の高い方々も大勢いらっしゃいます。ファッションセンスがあって、VIPともきちんとお話ができる能力を持ち、いろんな気配りができる、キャリリストとしての教育をしたにしても、それだけの条件を満たせる女性は、少ないです。ファッションに興味がない女性だっていますしね。選んだ人材は、確率で言えば一〇〇人中、3人くらいしかいない」

女性の社会進出の場をはげますためにつ

CEO 呼ばれる女性たち

くったはずなのに、これでは限られた人にしかチャンスをあげられない。そこで、川崎さんは考えた。

「ショップでの販売や、レストランやカフェでもキャラリストの要素は生かせるはず。特に女性はサービス・販売・接客業に向いていますから、マナーや立ち居振る舞いが素敵な、コミュニケーション能力の高い販売員を養成していこうと思ったんですね。今、モノというのは、それを手渡してくれる人の人柄で売れるというケースが圧倒的に多いんです。その商品やサービスを紹介してくれる人間のタオリティしだいで、商品バリューが決まります。仕事であっても、女性は感情豊富、気持ちに左右されてしまうことが多いですよね。メンタル面が仕事に出てしまう。ノッているときは最高の接客ができるし、反対に、最低の接客をしてしまうこともあります。ならば、女性たちが、常にノッている状態であれば、いつも最高の接客を提供できるということになります。そして、ただの販売員ではなく、お客さまひとりひとりのライフスタイルに合ったコーディネートをさりげなく提供できる。それがキャラリストなんです。キャラリストの教育では、自分の仕事は社会にとって必要性のあることだということを、徹底的に認識させます。仕事で幸福感や充実感を味わうことって、ものすごく大事なんですね。不満をもっていると、声を通じて、気持ちが伝わってしまうものなんです。メンタルな部分を改善すれば、女性は最強の戦力になります。一見、賞味期限のある仕事であっても、底の深い、信頼できる接客ができるようになれば、いつまでも活躍することができるんです」

こうして、キャラリストの人材を育成していくうちに、事業はますます広がった。店長と店頭販売員を派遣し、ファッション関連店舗やフード企業の運営・販売代行事業にも進出した。大型カフェにキャラリストの教育を受けたスタッフを派遣する場合もあれば、クライアントの会社のスタッフ研修を依頼されることもある。

「衣・食・住・遊の各ジャンルで、女性の雇用機会を、どんどんふやしていきたいですね」

シングルマザーの願いはわが子の幸せ

今、川崎さんは、エニーズとは別に「女性世帯主のNPO」の申請準備をしている。

「シングルマザーだけでなく、シングルアゲイン、シングルキャリアも含めて、世帯主である女性を、ミングルと呼んでいます。複合する、交じり合うという意味なんですが、シングルとマリッドをかけた造語として。ミスでもない、ミセスでもない、あえていえば、ミスターがいちばん近い女性（笑）。なんといっても一家の所得の柱ですからね。そういうミングルのネットワークづくりと、ミングルがいちばん困っている職業と住宅に対して、バックアップしてくれる大手企業の参画を目ざしています。自分たちで動かないと、行政レベルの支援を待っていたら、100年かかりますからね（笑）。今、こんなにもミングルが増えて、しかも社会から迫害されている実態を、知らない人のほうが多いでしょう。直に感じている私たちが、声を上げないとだれも気づかないかもしれない。私は、ありのままの姿をさらけ出して、オピニオンリーダーとして発言していきたいんです」

川崎さんの娘の愛香ちゃんは、今年、17歳。中学一年生のときに、クラシックバレエを志し、ジュリアード大学の舞踊科へ進むために、現在、単身で、ニューヨークのジュリアード大学付属高校に通っている。離れて暮らすことは寂しいが、早くから基路を見据え、一直線に突き進む娘を応援したい気持ちのほうが勝った。

「娘は完璧です。あの子がいてくれること、それが私の最大の勝ち。わが子の可能性に賭けてみようと思うの」シングルマザーたちの切実な叫び。それは、ただただわが子の幸せだけを願う、母たちの声なのだ。

1 [illegible]

2 [illegible]

3 [illegible]

4 [illegible]